

氏名	サレム カーラ レネ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第375号
学位授与年月日	平成24年3月26日
学位論文等題目	〈論文〉空間における頓絶法－沈黙のデザインの解釈－ 〈作品〉紙とのもじがたり

論文等審査委員

(主査)	東京芸術大学	教授	(美術学部)	河北 秀也
(論文第1副査)	〃	准教授	(〃)	藤崎 圭一郎
(作品第1副査)	〃	教授	(〃)	箕浦 昇一
(副査)	〃	准教授	(〃)	松下 計

(論文内容の要旨)

古代ギリシャ語の動詞“aposiopao”は「沈黙すること」を意味する。この原義から派生して、修辞法の一つを意味する単語“aposiopesis”が生まれた。日本語では「頓絶法」と訳される。原義が示すとおり、頓絶法において鍵となる役割を果たすのは沈黙である。沈黙は、語られなかったことが何であるか、対話のコンテキストが何であるかを示唆し、聞き手に気付かせ、反応を促す役割を果たす。本研究は、視覚的な手段によって空間における「頓絶法」を実現しようと試みたものである。それは、グラフィック・デザインの立場から見た「沈黙」の解釈ともいえる。また、この方法を適用して本研究が実現しようと試みたのは、異なる言語間の対話のための環境である。本論文は以下の順序でこれを述べる。

第1章では、まず、コンテキストが書き言葉といかに関連しているのかを明らかにするために、二つの特色ある書き言葉の基本的要素と特徴について述べる。二つの言語とはアラビア語と日本語である。グラフィック・デザインの対象となるのは書かれた文字あるいは単語であり、書き言葉における「沈黙」とは一義的には紙面における空白であるから、空白の機能について述べる。

第2章は、通常の文字レイアウトとは異なる「直線的でない」文字の空間レイアウトが語の解釈や対話の進行に対してどのような影響を与えるのかについて考察する。通常の散文は発話された言語と同様に直線的にレイアウトされる。レイアウトの方向は言語に依存するが、書くときの方向、読み手の視線移動は比較的単純である。しかし、読み手の視線の移動はデザインの対象であり、デザインによって新たな意味空間が作り出される。この場合、コンテキストは書き手と読み手の相互作用によって決定される。このプロセスを「具体詩」の実例から引き出す。

第3章では、頓絶法の定義を示すとともに、空間における頓絶法を実現するための準備として行った幾つかの実験的試みの結果について述べる。材料と媒体、前景と背景などの概念が導入され、それらが、対話の進行に対してどのような影響を持つかを論じる。幾つかの実験を通じて明らかになったことは、対話のための空間を構成する媒体となり、視覚表現の舞台、背景となる材料の重要性である。紙の表面の持つ微妙さ、特に和紙の持つ微妙な表情は、対話のためのコンテキストを提供し、異なる言語間の対話のための空間を成立させるリングア・フランカ（共通言語）の役割を果たす。和紙の持つ表情は、向かい合う二人が紙面から読み取り、共有する「沈黙」でもあり、「沈黙」の空間表現のための物質的な基盤である。また、実験では、モノリンガルな対話とバイリンガルな対話の比較実験も行った。特にバイリンガルな対話においては、言葉の意味そのものもさることながら、対話のコンテキストが重要であることが示唆された。

第4章は、空間における頓絶法を応用した視覚デザインの具体例について述べる。視覚表現の舞台と

して手作りの和紙を用い、異なる言語間の対話の軌跡を記録したアートワークの作成過程と、その意義について述べる。日本語とアラビア語という二つの言語間の対話は相互にとって未知の文字を用いた対話であったが、双方にとって未知の文字が同一の環境中に混在することによって新たな関係、新たなコンテキストが生まれた。我々があるものを別の視点から理解するためのひとつの方法として、新しい言語を学ぶという方法がある。自分にとって未知な言語のたった一つの単語を学ぶだけでも、未知の世界を垣間みることができる。本章で示した実験によって、異なる言語の話者の間で、未知の文字を交互に書き合うことにより、互いの言語を、そしてその背景にある互いの文化を学び合う対話のための環境を作り出すことができた。そして、二つの文化の「交差」を生み出す対話のための環境は、言葉と同じくらいありふれたある素材、しかも自然な環境から生まれた素材である和紙によって実現された。

第5章では、以上の考察と作品制作を通じて得られた結論について述べる。この研究では、デザイナーの役割もさることながら、コミュニケーションの媒体となる紙の重要性が確認された。ここで紙がコミュニケーションの触媒であると述べる時、単に印刷媒体としての役割を述べているのではない。対話のコンテキストを作ったり、「沈黙」を通じて対話を促進したりすると言う意味での役割であり、こちらの機能は通常の紙にはそれほど期待できない。個性ある、しかも偶然性を有する表情を持つ和紙のみが果たすことのできる機能である。振り返ると、それは、社会の中でアイデアを流通させるというデザイナーの機能そのものではないか。手漉きの和紙は、デザイナーが加工すべき対象物というよりも、社会での情報流通を支援するデザイナーのパートナーであり、同僚と考えた方がよい。日本の和紙作り職人が和紙を「生紙」と呼び、それは生き物だと考えているが、空間における頓絶法においても、和紙は、文字通り、生き物のような機能を果たした。本研究を通じて制作したアートワークは、二度とは起こらないだろうと思われる人々の間の実際のコミュニケーションの軌跡を記録したものである。そして、読み手と書き手の考えが時間とともに変化し発展するものであると同様、空間における頓絶法において和紙が実現した機能も、光や気候によって予期せぬ姿に変わっていくだろう。その意味でも和紙の機能は生き物のようである。

(博士論文審査結果の要旨)

本論文は、日本語とアラビア語という2つの言語の比較と、具体詩の考察を通して、ビジュアルコミュニケーションにおける「沈黙」表現を考察する論考である。沈黙もまたコミュニケーション表現である。筆者は、古代ギリシャ由来の修辞法である頓絶法 (Aposiopeses) に独自の解釈を加え、文字をめぐる沈黙の表現方法として、独自の頓絶法を提唱する。

第一章では日本語とアラビア語の文字の記述方法、具体的にはスペーシングや文字の区切り方などの空間の扱い方を考察し、そこに異言語の共通理解の基盤になり得る「沈黙」を見いだす。第二章前半では、日本語とアラビア語の比較をさらに深め、文章の流れや詩の叙述の例に挙げ、2つの言語において文字のレイアウトがコミュニケーションに与える影響を考察する。

筆者はレバノン出身であり、アラビア語を母国語とする。英語や中国語などと違い、多くの日本人にとってアラビア語は、その文字のかたちを見ても、意味も読み方も、文字と文字との区切りさえ理解できない。アルファベットや漢字は日本語の中に自然に入り込んでいることに比べれば、アラビア語と日本語の距離は遥かに遠い。この距離ゆえに2つの言語を比較することで、ふだん多くの人が気にすることがないスペーシングやテキストを追う視線の流れなど、文字をめぐる沈黙のコミュニケーションの役割を明示されていく。

第二章後半では、具体詩の空間レイアウトの考察を行っている。特に、新國誠一とフランス人ピエール・ガルニエ夫妻が共同制作した「視覚詩」の事例は、筆者の作品に大きな影響を与えていることがみとれる。しかし、筆者のオリジナリティは、非言語的コンテキストの依り代として「手漉き和紙」を

見いだすことである。

第三章以降、「空間における頓絶法」の定義づけから、手漉き和紙をつかった独自の作品制作を解説する。工業製品としての紙は均質を前提としているが、手漉き和紙は同じものが二度と出来ない。一枚の紙の中でも、繊維の表情は均質でない。それが一期一会のコミュニケーションの基底材となる。手漉き和紙の何も書かれていない空間（＝沈黙）は無限に豊さをもつ。それは工業製品である均質な紙の上に現れた沈黙よりはるかに濃密な詩的コミュニケーションの基盤となる。さらに紙の繊維を自然光に晒せば、時々刻々と紙の表情は変化する。筆者は一回性を追究するために時間が経つと表情が変化する漆や柿渋も利用する。

和紙という豊穡な沈黙の上に展開される文字コミュニケーションを綿密な例証をもって書き表した本論文は、言語をめぐる視覚伝達デザインの地平に新たな視座を提唱するものであり、非常に意義深いものである。

よって、本論文を、東京藝術大学大学院美術研究科の博士論文として合格とする。

（作品審査結果の要旨）

論理的構築によりスキのない造形を作りあげる西洋的手法でなく頓挫法（考えを完結せずあえて途中で中断することにより見手、聞き手の注意を促す）を用いた作品は可能性に満ちた作品になった。自ら和紙を漉き不定形で自然なマチエールを持つ和紙と正対しそこから湧き上がるイメージを造形化していく作業。柿渋による着色、あるいは和紙そのままの表情を残す、そしてシミをも利用しそこから導きだされるイメージによってアラビア文字と日本文字のコラボレーションによるビジュアルの形態化と定着。さらに裏彩色手法、透過光の利用。結果自然に促され定着された画面のレイアウトは魅力に溢れた造形を作り出している。黄金分割に代表される計算し尽くされたスキのない造形空間とは正反対の不定形だがなぜかバランスのとれた造形空間は見る者の心を自由への旅に導き大きな安らぎを与えてくれる。周到な計画と着実な実行そして偶然性を混ぜ合わせた彼女の表現手法は見事に作品として結実し、今までの真摯な研究成果が窺える作品群と成った。故に博士課程合格を認めることとする。

（総合審査結果の要旨）

多くのデザイン科への留学生がそうであるように、サレム カーラ レネも母国のアラビア語と日本語の文字についてタイポグラフィ的デザイン比較を行った。しかし、彼女が着目したのはその文字そのものの形体ではなく、アラビア語、日本語そう方にある沈黙ということである。沈黙を書き言葉に置き換えれば空白という事になる。話言葉における沈黙と書き言葉における空白とは、一概に同一とは言えないがカーラは遊びという視点を持ちながら、強引に空白を沈黙と解釈していった。自ら漉いた和紙を用い漆で日本語とアラビア語を書き、和紙に自然にできたムラ（模様）を生かし、文字そのものと空白そのものをグラフィックデザイン的に表現していった。

論文では古代ギリシャ語で沈黙することを意味する *aposiopao* から派生した修辞法の語である *aposiopesis* が日本語では頓絶法と訳されることから、空間における頓絶法として数々の事例を紹介した。オイゲン・ゴムリンガーの詩、ソシユール言語学、ウンベルト・エーコの記号論、アラビア語の研究、日本語の研究など幅広く行った。俳句の形式、電報の形式など特殊な空間にある日本語の研究など、さまざまな角度から試行錯誤を行った。そしてたどり着いたのが、和紙だった。職人の間で「生紙」と言われている和紙はまさに、生き物のようで光と関係しアラビア語と日本語の二度とできないコミュニケーション触媒となった。この経験は日本留学という貴重な経験を無駄にせず、それも美術大学の研究生に相応しいものとして高く評価できる。博士号を取得するのにふさわしいと判断した。